「double」～験しの星～

グー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
「ｄｏｕｂｌｅ」～験しの星～

【Ｎコード】
Ｎ４３４１Ｊ

【作者名】
グー

【あらすじ】
悪魔と神
近くて遠い二つの星
剣と魔法と科学
真実と虚言

創世記に書かれた真実とは？
三千年の時を経て今物語が動き出す！

0章『創世記』（前書き）

はじめまして
興味を持ってくれてありがとうございます
是非ご覧下さい

0章『創世記』

ある時、神は星を創った

その星は『死の星』

冷たく乾く大地
凍り付く海
荒れ狂う火山
鳴り響く雷鳴
唸る暴風
深淵なる闇

神は嘆き悲しんだ

己の未熟さを
創った星の運命を
眼下に広がる光景を

その時神の流した一筋の涙。涙は火山に吸い込まれるように落ち、灼熱のようだった火口はピタリとおさまり、緑の生い茂る山となった。

神は喜び笑顔となった。その暖かで眩しい笑顔は闇を払い、凍り付いた海を溶かした。風は穏やかになり、雷鳴も嘘のように収まった。

大地も豊かなものとなり恵みの雨も降り、草木が生い茂った。
星はいつしか『命の星』となった。
その美しい星には動物が野山を駆け、自然の精霊が空を翔(かけ)た。
そして『ヒト』が生まれた。
自然の恵みに感謝し、精霊と語らっていた。

ある時輝く命に誘われて悪魔がやってきた。
悪魔は瞬く間に命を喰らい尽くし、星は再び『死の星』となった。
神は怒り悪魔を滅ぼした。それは決して容易いことではなく、神自身も多大なる傷を受けた。
戦いの後回りを見渡すと星は荒れ果てていた。神は悲嘆にくれたが、そのとき奇跡が起きた。
悪魔の体から光が離れていったかと思うと、神が息を呑む間に星がいつかの輝きを取り戻していった。
神の心は喜びに躍ったが同時に心配もあった。
悪魔は三千年を経て再び蘇ることを知っていたのだ。
また、今の自分にそれを防ぐ手だてはないことも。
自らの傷も深く、三千年では癒しきれないであろう事も。
神は我が子に全てを託すことにした。命あるものに自らの力を分け与えた。そして最後の力を振り絞り悪魔を二つに分け地中深くに閉

じこめた。

神は三千年の後我が子らが手を取り合い、悪魔を再び滅す未来を夢見ながら永久の眠りについた……

0章『創世記』（後書き）

ご清読ありがとうございました。
感想・評価があれば挫折しないための励みにもなりますので是非よろしくお願いします！出来れば向上のためにアドバイスや批評も頂きたいです

1章1話『出会い』

どこまでも続き、青く澄み渡る空。頬を撫でる風は優しく、緑に生い茂る草木を揺らしていく。
霞む地平線はどこまでもこの風景が続くのではないかという錯覚を引き起こす。

鳥の囀りと草木を揺らす音を背景に、カーン、カーンという音が響いている。
その音が響く中心では一人の青年が斧を大きな木に向かって振っている。

どうやら木こりであろうその青年は赤茶色の短く切り揃えられた髪に白のタオルを額に巻き、長身で良く鍛えられた体には汗が滲んでいる。細いその目の奥にはうっすらと茶色の瞳が覗き、目の前の木を見据えている。

「ふう…」

大きな音を立てて木が倒れていった。
長時間木を切り続けて疲労していたのだろう。青年はその場に腰を下ろし首に巻いたタオルで汗を拭っている。
しかしその表情はどこか満足そうである。大きな木を倒したことで達成感を得ているのだろう。

「さぁ、後はこの木を持って帰らないとな。これがまた重労働なんだよな。…ん？あれは…？」

青年はそう呟き今倒した木の奥を見つめた。
そこには人影のようなものが見え、ゆっくりとこちらに近づいてきているように見える。
するとその人影が突然倒れた。

「！？」

青年は慌てて倒れた人影まで走り寄った。
そこには少年が倒れており、汗をぐっしょりとかいており、息も絶え絶えだ。
うわごとのように水を求めている。

「ほら！水だ！あわてるなよ！ゆっくり飲むんだ」
「げほっ！げほっ！…ん…んぐ……んぐ……っはぁ！」

青年は急いで先ほどまで休憩していたところに水を取りに行き、その少年に水を飲ませた。
疲労の極地にあったため、最初こそ手こずり咽せていたが、すぐにぐびぐびと飲み始めた。
少年はようやく落ち着いたようだがまだ目の焦点が定まっておらず、青年には気付いていないようだ。
青年が改めて少年を見ると艶のある金色の髪に大きな金色の瞳。その瞳は緩やかな曲線を描く眉と相まって優しげな表情を作り出している。体は細く華奢であり、その整った容姿はまるで妖精のようで、一目で性別の判断が困難なほどであった。

「大丈夫か？俺はファル。ファル・レイだ」

そこで少年はようやく青年ーファルーに気付いたようだ。
青年の方を向くと頭を下げ、笑顔を作った。

「あなたが助けてくれたんですね！ありがとうございます！」

「いや、気にしなくていい。それより、ここで会ったのも何かの縁だ。名前くらい教えてくれないか？」

ファルは少年の礼を手を挙げて制すると、少年に自己紹介を促した。当然自己紹介が帰ってくるものと思っていたが、少年は困ったような顔をしてこちらを見ている。

「それが…実は何も覚えていないんです。気付いたらこの草原に倒れていて。遠くから大きな音がしていたのでそれを頼りにこっちに歩いてきていたんですけど…。体力が持たずに倒れちゃいました。」

「悪いこと聞いちゃったな…。何か手がかりになるようなものは持ってないのか？」

ファルが頬を掻きながら少年に尋ねると少年は胸元から一つのペンダントをとり出した。
ペンダントには金色に輝く宝石が埋め込まれており、装飾も複雑であり、宝石に対する知識がないファルでも高価なものであることは一目でわかった。

「これが首に掛かっていました。後は…この服くらいですね。」

「その服は見たところ何の変哲もないもののようだな。その宝石はなんだか価値がありそうだが…。見たこともないな。イブラかユエルにでも行けば何かわかるかもしれないが…。じゃあこの先行く当てもないのか？良かったら俺の村に来るか？」

「いいんですか？すっごく嬉しいです！」

少年はファルの言葉に弾けるような笑顔を返した。
余程嬉しかったのだろう。その声も弾んでいる。
つられてファルも笑顔になる。ただでさえ細い目が更に細められ既に瞳が見えていない。

「大歓迎さ。でも名前がないと不便だな。…ウィンって呼んでもいいかい？」

「ありがとうございます！ずっと名前が欲しかったんです！ぼくもファルさんって呼んでいいですか？」

少年ーウィンーの言葉にファルは笑い、立ち上がりウィンに手を差し伸べた。
ウィンがその手を掴むとファルはウィンを引き起こした。
空いた手で肩を叩くともう一度笑いかけた。

「さん、はいらないな。ファルでいいよ。さぁ行こうか、もう十分休んだろ。俺も仕事があるしな。少し手伝ってもらうかな」

「はい！何でも言ってください！」

「敬語もいらないな。友達になったと思ったのは俺だけかな？」

「うん！ファル…ありがとう！」

ウィンの瞳にはうっすらと涙が滲んでいるように見える。
記憶をなくす以前のことはわからないが今日一日記憶も何もなく孤独に過ごし、友達といってくれる存在に会い安心したのだろう。

ファルには胸に下げた金色の宝石が淡く光ったように見えたがきっと気のせいだろうと思った。
それよりもこの笑顔の前では全てのものが霞んで見えるようだった。見るもの全てがつられて笑うような太陽のような笑顔。その笑顔を崩したくはないな、とファルは思った。

「さぁ行くぞ！じゃああの木を切って運ぶからな！がんばるぞ！」

「うん！任せてよ！」

二人は先ほどファルが切り倒した木のほうに向かって歩き出した。
二人の頭上では光り輝く大きな太陽と一つの大きな星が見守っていた

1章2話『フレイ村』

青く染み渡っていた空はいつしかその色を朱に染め、高くその姿を見せつけていた太陽は遙か彼方に見える山へと姿を隠そうとしていた。
夕暮れに全ての景色が朱へと染まるこの時間、ファルはこの時間が好きだった。いつもはこの時間は切った木を一人で村へと運んでいたが、そのことを寂しいと思ったことはなかった。
しかし、今日はウィンが隣にいる。ウィンははじめて見る夕暮れに感動しているのか徐々に隠れゆく太陽を言葉も発さずじっと眺めている。
その姿を見るとファルは隣に誰かがいるっていいもんだな、と何となく思った。
どれほど歩いただろうか、目の前に灯りが見えてきた。その灯りを確認するとファルは隣で飽きずに夕陽を眺めているウィンに話しかけた。

「ほら、見えてきたぞ。あれが俺の村、フレイ村だ」

「わぁ！たくさん人がいるね！」

「２０人ほどの小さな村なんだがな。さて、俺の家にいったん木を置いたら村長に挨拶しに行こうか」

「うん」

「ほら、すぐそこの家が俺の家だ。ちょっと待ってろ」

そう言うとファルは家の扉を開け木を運んだかと思うとすぐに出て

きた。

「じゃあ行こうか。村長の家は一番奥の大きな家だ」

そう言い歩き出したファルにウィンはついて行く。ファルの歩みに淀みはなく、力強いものだった。

しかしウィンは少しふらふらしている。無理もない、一日歩き通しで疲れたのだろう。

そんなウィンの姿に気付いたファルは優しげな表情を浮かべた。

「疲れたか？悪いな、もう着いたから後少しがんばれ」

「うん、まだ大丈夫だよ」

その言葉にファルはそっと微笑むとウィンと共に目の前の一際大きな家の扉を叩いた。

程なくして木が擦れる音と共に扉が開き、中から老人が出てきた。

その老人は頭髪こそ無いが、豊かな口髭や穏やかな赤の瞳、ピンと伸びた背筋と年齢より若く見える。

この男が村長なのだろう。ウィンはぼんやりとそう思った。

その思考を裏付けるようにファルから言葉が発せられた。

「こんばんは村長。こんな時間にすみません」

「おお、ファルか。よいよい。この年にもなると人の訪問が嬉しくてな、礼を言いたいくらいじゃよ。ん？その少年は？この村では見ない顔じゃが…」

村長はファルの言葉に顔を綻ばせ応対していたが、その傍らに見慣れない少年がいることに気付くと、訝しげな表情をウィンの方に向

けた。
しかしその目には敵意や悪意の類は見られなく、純粋に少年の存在を疑問に思っているようだった。
突然話しを振られたウィンは慌てて返答に詰まるが、ファルがそれを手で制してウィンのことを村長に紹介した

「あっ！えと…僕は…」

「彼の名前はウィンと言います。キルルの森で倒れていたところを俺が見つけました。ウィンは記憶を失っていて、自分の名前もわからないようなのでウィンという名前も俺が付けたものです。行く当てもなにも無いというので俺の家に住ませようと思ってまずは村長に挨拶に来ました。」

ファルのその言葉に村長は優しげな笑顔をウィンに向けた。
その笑顔は穏やかなものであり、ウィンは一目でこの老人のことが好きになった。
そうしてウィンが笑顔を返すと村長の笑みは更に深いものとなった。

「それは大変だったな。ウィン、君さえ良ければこの村に住むと良い。儂は皆に村長と呼ばれておる。なに、みんな一番の年寄りを立ててくれておるだけだ。畏まらずともよいよ。気楽に接してくれ」

「はい、僕はウィンです。今日からよろしくお願いします！」

「村長、すみませんが今日はこれで失礼します。ウィンがとても疲れているようなので帰って食事をとって眠りたいと思います。」

「ウム、そうであろうな。なに、気にすることはないよ。そのうち歓迎の宴を開くことにしよう」

「そうですね。では俺はこれで」

ファルはそう言い村長の家を後にした。慌ててウィンもついてきた。歩きながらウィンは先ほどのファルと村長の会話の中でわからない言葉があったのでそのことについて質問することにした。

「歓迎の宴ってなに？」

その言葉を聞くとファルは一瞬キョトンとするが言葉の意味がわかったのか笑い出した。
突然笑われたことにウィンは困惑するが笑いが収まるとファルが喋り出したため、その言葉を聞くことにした。

「そうか、そういうこともわからないんだな。歓迎の宴って言うのは僕がウィンです、よろしくお願いしますって言ってみんなでそれを祝って飲んで食べて騒ぐんだよ」

「そんな！僕なんかのためにそんなことしなくていいよ！ただでさえ突然現れて皆さんに迷惑をかけてるのに！」

「気にするな、何もない静かな村だからな、何かあればみんな宴を開きたいんだよ。遠慮のしすぎも良くないぞ？

「…うん！楽しみだな！」

「さぁ、ついたぞ。遠慮せず入るといい。今日からおまえの家にもなるんだからな」

そう言いファルは家の扉を開けてウィンのことを招き入れた。ウィ

ンはしばらく家の中を眺め回していたが突然その場に倒れた。
ファルは驚いて目を向けるが倒れた表情はどこか楽しげであり安らかな寝息を立てている。
緊張の糸が切れたのだろう。ファルはそっと微笑むとウィンの体を持ち上げて寝室に連れて行き、そっと床に就かせた。

「おやすみ」

ファルは寝室の扉を閉めた。家の灯りが届かない暗い部屋で、月明かりだけがウィンの顔を照らしていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4341j/

「double」～験しの星～

2010年10月15日21時07分発行